

# Abramsky- Categorical Logic

ashiato45 take notes

2015 年 11 月 2 日

## 1 Introduction

### 1.1 From Elements To Arrows

### 1.2 Categories Defined

### 1.3 Diagrams in Categories

### 1.4 First Notions

- (Definition 15: subcategory):  $\mathbb{C}$  を圏とし、

$$\mathbf{Ob}(\mathbb{D}) \subset \mathbf{Ob}(\mathbb{C}), \quad \forall A, B \in \mathbf{Ob}(\mathbb{D}): \mathcal{D}(A, B) \subset \mathcal{C}(A, B) \quad (1)$$

がるとする。 $\mathbb{D}$  が  $\mathbb{C}$  の subcategory であるとは、

- $A \in \mathbf{Ob}(\mathbb{D}) \implies \text{id}_A \in \mathcal{D}(A, A)$  となる
- $f \in \mathcal{D}(A, B), g \in \mathcal{D}(B, C) \implies g \circ f \in \mathcal{D}(A, C)$

となること。

- (full, lluf): subcategory が full であるとは、 $A$  から  $B$  への射がもとの category のものと一致すること。lluf であるとは、オブジェクトをすべて引き継いでいること。

## 2 Some Basic Constructions

### 2.1 Initial and Terminal Objects

### 2.2 Products and Coproducts

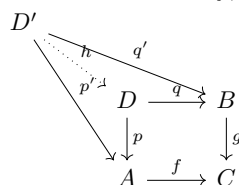
#### 2.2.1 Products

### 2.3 Coproducts

### 2.4 Pullbacks and Equalisers

#### 2.4.1 Pullbacks

- $A \xrightarrow{f} C \xleftarrow{g} B$  について、 $f, g$  に沿った pullback とは、 $A \xleftarrow{p} D \xrightarrow{q} B$  で、



という普遍性を持つもの。

- $((f, g)$ -cone):  $A \xrightarrow{f} C \xleftarrow{g} B$  について、 $(f, g)$ -one とは  $(D, p, q)$  で 
$$\begin{array}{ccc} D & \xrightarrow{q} & B \\ \downarrow p & & \downarrow g \\ A & \xrightarrow{f} & C \end{array}$$
 となるもの。
- $((f, g)$ -cone の morphism):  $A \xrightarrow{f} C \xleftarrow{g} B$  についてこの cone たちを考える。 $(f, g)$ -cone である、 $(D_1, p_1, q_1), (D_2, p_2, q_2)$  について、この間の morphism とは、
$$\begin{array}{ccccc} & & D_1 & & \\ & \swarrow p_1 & \downarrow h & \searrow q_1 & \\ A & & & & B \\ & \swarrow p_2 & \downarrow h & \searrow q_2 & \\ & & D_2 & & \end{array}$$
 となるもの。

## 2.4.2 Equalisers

- (Definition 28: equaliser):  $A \begin{array}{c} \xrightarrow{f} \\ \xleftarrow{g} \end{array} B$  を考える。 $(f, g)$  の equaliser とは、
  - arrow  $e: E \rightarrow A$  で、
  - $f \circ e = g \circ e$  をみたし、
  - $$\begin{array}{ccc} E & \xrightarrow{e} & A \\ \uparrow \hat{h} & \nearrow h & \uparrow \\ D & & \end{array} \begin{array}{c} \xrightarrow{f} \\ \xleftarrow{g} \end{array} B$$
 という普遍性を持つもの。
- たとえば、 $f: (x, y) \mapsto x^2 + y^2, g: (x, y) \mapsto 1$  について、単位円からの  $\mathbb{R}^2$  への埋め込みは equaliser になっている。

## 2.5 Limits and Colimits

## 3 Functors

### 3.1 Basics

### 3.2 Further Examples

- poset の例:  $\text{poset}^{*1}P$  が時間をあらわすとき、 $F: P \rightarrow \text{Set}$  は集合の時間変化をあらわす。
- **List** は functor になる。つまり、 $f: X \rightarrow Y$  を  $\text{List}(X) \rightarrow \text{List}(Y)$  にうつす: 
$$\frac{f: X \rightarrow Y}{\text{List}(f): \text{list}(X) \rightarrow \text{list}(Y)}$$
  -
- さらに構造を持たせることもできる。**List** を monoid とみなせば、 $\text{MList}: \text{Set} \rightarrow \text{Mon}$  を上と同様に定義すればよい。**List** は単位元を空リストとし、積を連結とすれば monoid になっている。
- (free monoid):  $\text{MList}(X)$  を  $X$  上の free monoid という。

### 3.3 Contravariance

### 3.4 Properties of Functors

- (Definition 48: faithful): functor の、arrow をうつす部分が単射。
- (full): functor の、arrow をうつす部分が全射。
- (embedding): functor が full で faithful で「object に関して単射」である。

---

\*1 反射対称推移

- (essentially surjective):

$$\forall B \in \mathbf{Ob}(\mathcal{D}): \exists A \in \mathbf{Ob}(\mathcal{C}): F(A) \simeq B \quad (2)$$

つまり、「『object についての全射』を同型で弱めた」もの。

- (equivalence): functor が full で faithful で essentially surjective であること。
- (isomorphism): 合成して 1。
- (preservation)  $P$  を arrow の性質とする\*2。  $F: \mathcal{C} \rightarrow \mathcal{D}$  が  $P$  を preserve するとは、  $f$  が  $P$  をみたすとき  $F(f)$  も  $P$  をみたすこと。
- (reflect):  $F(f)$  が  $P$  をみたすとき  $f$  も  $P$  をみたすこと。

## 4 Natural Transformations

### 4.1 Basics

- (natural isomorphism): 自然変換  $t: F \rightarrow G$  について、

$$\forall A \in \mathbf{Ob}(\mathcal{C}): t_A \text{ は isomorphism} \quad (3)$$

となるとき、  $t$  を natural isomorphism という。

- Functorid と、  $\text{Functor} \times \circ \langle \text{id}, \text{id} \rangle$  (これは  $f \mapsto \langle f, f \rangle$  と定義される) の間の  $\Delta: \text{id} \rightarrow \times \circ \langle \text{id}, \text{id} \rangle$  を  $X \in \mathbf{Set}$  について、

$$\Delta_X: x \rightarrow X \times X, \quad x \mapsto (x, x) \quad (4)$$

$$X \xrightarrow{f} Y$$

と定義し、これを考える。これは、  $X \xrightarrow{f} Y$  を commute させるので、自然変換になっている。

$$\begin{array}{ccc} X & \xrightarrow{f} & Y \\ \downarrow \Delta_X & & \downarrow \Delta_Y \\ X \times X & \xrightarrow{f \times f} & Y \times Y \end{array}$$

- binary products がある圏  $\mathbb{C}$  について、上と同様に functorid から  $\text{functorid} \times \text{id}$  への自然変換  $\Delta_A$  が定義できる。
- binary products がある圏  $\mathbb{C}$  について、  $\text{functor} \times: \mathbb{C} \times \mathbb{C} \rightarrow \mathbb{C}$  を product category からとってその 2 つの binary products をとるものとし、  $\text{functor} \pi_1: \mathbb{C} \times \mathbb{C} \rightarrow \mathbb{C}$  を product category をとってその片方をとるものとする。このとき、この 2 つの functor の間の transformation  $\pi_1$  を、各  $(A, B) \in \mathbf{Ob}(\mathbb{C} \times \mathbb{C})$  について、

$$(\pi_1)_{(A,B)}: (A, B) \mapsto A \quad (5)$$

と定義すると、これは natural transformation になる。

- $\mathbb{C}$  を terminal  $T$  をもつ圏とし、  $\text{functor} K_T: \mathbb{C} \rightarrow \mathbb{C}$  を、すべての object を  $T$  にうつし、すべての射を  $\text{id}_T$  にうつすものとする。すると、  $\text{id}$  から  $K_T$  への transformation を

$$\tau_A: c \mapsto (\text{id}_c \rightarrow K_T c) = (c \rightarrow T) \quad (6)$$

を、  $T$  が terminal であることから  $c \rightarrow T$  が 1 つに定まることを使って定義する。すると、あきらかに

$$\begin{array}{ccccc} c & \text{id}_c = c & \xrightarrow{\tau_c} & K_T c = T & \\ \downarrow f & \downarrow \text{id}_f = f & & \downarrow Kf = \text{id}_T & \\ c' & \text{id}_{c'} = c' & \xrightarrow{\tau_{c'}} & K_T c' = T & \end{array}$$

の図示が満たされるので (重ね重ね terminal の性質に注意)、  $\tau$  は natural transformation になっている。

---

\*2 monic とか epi とか

- **List** 間の transformation  $\mathbf{List}X \xrightarrow{\text{reverse}_X} \mathbf{List}X$  をリストの逆転と定義すると、これは
 
$$\begin{array}{ccc} X & & \mathbf{List}X \xrightarrow{\text{reverse}_X} \mathbf{List}X \\ \downarrow f & & \downarrow \mathbf{List}f \\ X' & & \mathbf{List}X \xrightarrow{\text{reverse}_{X'}} \mathbf{List}X' \end{array}$$

をあきらかに満たし、natural。

- $\text{id}$  から **List** への transformation  $\text{id}X \xrightarrow{\text{unit}_X} \mathbf{List}X$  を 1 要素リストの生成と定義すると、これはあきらかに natural。
- $\mathbf{List}(\mathbf{List}(X))$  から  $\mathbf{List}(X)$  への transformation をリストをつぶすことと定義すると、**List** のネストで矢がどこへ飛ぶかを考えると natural。
- functor  $P: \mathbf{Mon} \rightarrow \mathbf{Set}$  を、monoid を忘れつつ対角線に埋め込む  $(M, \cdot, 1) \mapsto M \times M, f \mapsto f \times f$  と定義する。さらに、 $U$  を単に forget する functor とする。このとき、 $P$  から  $U$  への transformation  $t_{(M, \cdot, 1)}$  をもとの

$$\begin{array}{ccccc} (M, \bullet, 1) & & M \times M & \xrightarrow{t_{(M, \bullet, 1)}} & M \\ \downarrow f & & \downarrow f \times f & & \downarrow f \\ (N, \bullet, 1) & & N \times N & \xrightarrow{t_{(N, \bullet, 1)}} & N \end{array} \text{ が commute し、natural。}$$

モノイドでの積を取るとすると、

## 4.2 Further Examples

- $\mathbb{C}$  の射  $f: A \rightarrow B$  を考える。このとき、 $\text{hom}_{\mathbb{C}}(B, ?)$  から  $\text{hom}_{\mathbb{C}}(A, ?)$  への transformation  $\text{hom}_{\mathbb{C}}(f, ?): \text{hom}_{\mathbb{C}}(B, C) \rightarrow$

$$\begin{array}{ccc} C & \text{hom}_{\mathbb{C}}(B, C) & \xrightarrow{? \circ f} \text{hom}_{\mathbb{C}}(A, C) \\ \downarrow h & \downarrow h \circ ? & \downarrow h \circ ? \\ D & \text{hom}_{\mathbb{C}}(B, D) & \xrightarrow{? \circ f} \text{hom}_{\mathbb{C}}(A, D) \end{array} \text{ は}$$

あきらかに commute で natural になる。

- (Lemma 1; Yoneda Lemma): (どの Hom-functor 間の natural transformation は矢の合成としてあらわせる)  $A, B \in \mathbf{Ob}(\mathbb{C})$  とする。  $t$  を  $\text{hom}(A, ?)$  から  $\text{hom}(B, ?)$  への natural transformation とする。  $t = (\circ f)$  となる  $f: B \rightarrow A$  がただ 1 つ存在する。

$\circ f = t_A(\text{id}_A)$  とすればよいことを示す。

$C \in \mathbf{Ob}(\mathbb{C})$  を fix する。  $t(C) = (\circ f)(C)$  を示せばよい (この型は  $\text{hom}(A, C) \rightarrow \text{hom}(B, C)$  になっている)。関手  $\text{hom}(A, ?), \text{hom}(B, ?)$  は圏  $\mathbb{C}$  から  $\mathbf{Set}$  への関手なので、射は関数になっている。したがって、外延的に等価性を示せる。  $g: A \rightarrow C$  を  $\mathbf{Ar}(\mathbb{C})$  から fix する。  $t(C)(g) = (\circ f)(C)(g)$  を示せばよい。  $g$  に  $t$  の naturality を

$$\begin{array}{ccc} A & \text{hom}(A, A) & \xrightarrow{t_A} \text{hom}(B, A) \\ \downarrow g & \downarrow g \circ & \downarrow g \circ \\ C & \text{hom}(A, C) & \xrightarrow{t_C} \text{hom}(B, C) \end{array} \text{ を得る。}$$

$$t_C(g) = t_C((g \circ ?)(\text{id}_A)) \stackrel{\text{comm}}{=} (g \circ ?)t_A(\text{id}_A) \stackrel{f \text{ の定義}}{=} (g \circ ?)f = g \circ f = (\circ f)g. \quad (7)$$

$g$  の fix を外し、  $t_C = (\circ f) = (\circ f)(C)$  となる。よって、  $t = (\circ f)$  となる。示された。

- (Definition 57; equivalent) 圏  $\mathbb{C}, \mathbb{D}$  が equivalent であるとは、関手  $F: \mathbb{C} \rightarrow \mathbb{D}, G: \mathbb{D} \rightarrow \mathbb{C}$  があり、  $G \circ F \simeq \text{id}_{\mathbb{C}}, F \circ G \simeq \text{id}_{\mathbb{D}}$  となる。

## 4.3 Functor Categories

## 5 Universality and Adjoints

### 5.1 Adjunctions for Posets

- ( $g$ -approximation of  $x$ ):  $x \in P$  とする。  $P, Q$  を Poset の圏の object (つまり poset) とする。  $g: Q \rightarrow P$  を poset 準同型とする。  $x \leq g(y)$  となる  $y \in Q$  を  $x$  の  $g$ -approximation という。

- (best  $g$ -approximation of  $x$ ):  $y \in Q$  で

$$x \leq g(y) \wedge (x \leq g(z) \implies y \leq z) \quad (8)$$

- $g$  が全射であり、したがって常に  $g$ -approximation があるとしても best なものがあるとは限らない。これが canonical choice の問題になる。
- (poset の left adjoint): もしも全ての  $x \in P$  についてその best  $g$ -approximation があるなら、それをもって  $f: P \rightarrow Q$  を定義できる。この  $f$  を  $g$  の left adjoint という。このとき、

$$x \leq g(z) \iff f(x) \leq z \quad (9)$$

となっている。

- (binary relation の left adjoint): 二項関係の圏をかんがえる。  $R \subset X \times Y$  とする。

$$f_R: \mathcal{P}(X) \rightarrow \mathcal{P}(Y), \quad S \mapsto \bigcup_{x \in S, xRy} y \quad (10)$$

$f_R$  は right adjoint  $[R]: \mathcal{P}(Y) \rightarrow \mathcal{P}(X)$  は  $S, T \subset \mathcal{P}(Y)$  としておいて、

$$S \subset [R]T \iff f_R(S) \subset T \quad (11)$$

をみたしてほしいが、これは

$$[R]T := \{x \in X; xRy \implies y \in T\} \quad (12)$$

である。

- (powerset の left adjoint):  $f^{-1}: \mathcal{P}(Y) \rightarrow \mathcal{P}(X)$  を考えることができるが、left adjoint  $\exists(f): \mathcal{P}(X) \rightarrow \mathcal{P}(Y)$  と right adjoint  $\forall(f): \mathcal{P}(X) \rightarrow \mathcal{P}(Y)$ 、すなわち  $S \subset X, T \subset Y$  について、

$$\exists(f)(S) \subset T \iff S \subset f^{-1}(T), \quad f^{-1}(T) \subset S \iff T \subset \forall(f)(S). \quad (13)$$

これは、 $\exists(f)$  を  $S$  の像とし、 $\forall(f)(S)$  を「 $y$  に行く  $x$  は全部  $S$  上」となるような  $y$  たちとする。つまり、 $x \in S$  から  $f$  で飛ばした先の点  $f(x)$  が、 $S$  の外から来てはいけない。

## 5.2 Universal Arrows and Adjoints

- (Definition 64:universal arrow)  $G: \mathbb{D} \rightarrow \mathbb{C}$  を functor とする。  $C \in \mathbf{Ob}(\mathbb{C})$  から  $G$  への universal arrow とは、  $(D \in \mathbf{Ob}(\mathbb{D}), \eta \in \text{hom}_{\mathbb{C}}(C, G(D)))$  の組で、

$$\forall D' \in \mathbf{Ob}(\mathbb{D}): \forall f: C \rightarrow G(D'): \begin{array}{ccc} C & \xrightarrow{\eta} & G(D) \\ & \searrow f & \downarrow G(\hat{f}) \\ & & G(D') \end{array} \quad \begin{array}{c} D \\ \downarrow \hat{f} \\ D' \end{array}$$

をみたすもの。

一意性の条件は式で

$$\forall h: D \rightarrow D': \widehat{G(D \circ \eta)} = h \quad (14)$$

ともあらわせる。 $\bigcirc h: D \rightarrow D'$  で、  $f = G(D) \circ \eta$  なら  $\hat{f} = h$  であることを示せばよいが、ハットのなかを置き換えて、これは  $\widehat{G(D) \circ \eta} = h$  である。

- $U$  を monoid から集合への forget する関手とする。このとき、  $X$  から  $U$  への universal arrow として、  $(\mathbf{MList}(X), \eta_X)$  がとれる。ただし、  $\eta_X: X \rightarrow U(\mathbf{MList}(X))$  は 1 要素リストの生成。 $\bigcirc$  任意の集合圏での関数  $f: X \rightarrow M$  について

$$\hat{f}: \mathbf{MList}(X) \rightarrow (M, \bullet, 1), \quad [x_1, \dots, x_n] \mapsto f(x_1) \dots f(x_n) \quad (15)$$

Setの話

Monの話

が存在して、これが  $X \xrightarrow{\eta_X} U(\mathbf{MList}(X))$   $\mathbf{MList}(X)$  の条件をみたす。実際、

$$\begin{array}{ccc} X & \xrightarrow{\eta_X} & U(\mathbf{MList}(X)) \\ & \searrow f & \downarrow U(\hat{f}) \\ & & M \end{array} \quad \begin{array}{ccc} & & \downarrow \hat{f} \\ & & (M, \bullet, 1) \end{array}$$

$$(U(\hat{f}) \circ \eta_X)(x) = U(\hat{f})([x]) = f(x) \quad (16)$$

である。一意性は、上の条件より  $U(\widehat{h}) \circ \eta_X = h$  を示せばよい。

$$U(\widehat{h}) \circ \eta_X([x_1, \dots, x_n]) = (U(h) \circ \eta_X)(x_1) \cdots (U(h) \circ \eta_X)(x_n) \quad (17)$$

$$= U(h)([x_1]) \cdots U(h)([x_n]) \quad (18)$$

$$= h([x_1]) \cdots h([x_n]) \quad (19)$$

$$= h([x_1, \dots, x_n]). \quad (20)$$

- (Definition 68:adjunction,adjoint)  $\mathbb{C}, \mathbb{D}$  を圏とする。  $\mathbb{C}$  から  $\mathbb{D}$  への adjunction は

- $F: \mathbb{C}$  から  $\mathbb{D}$  への functor
- $G: \mathbb{D}$  から  $\mathbb{C}$  への functor
- $\theta: \mathbb{C}$  の object  $A, B$  で添字付けられた bijection の family

$$\theta_{A,B}: \mathbb{C}(A, G(B)) \xrightarrow{\sim} \mathbb{D}(F(A), B) \quad (21)$$

で、  $A$  を run したとき自然になり、  $B$  を run したとき自然になるもの。

- $F$  を  $G$  の left adjoint といい、  $G$  を  $F$  の right adjoint という。

- 上の 2 つの自然性について考えてみる。まず、  $A$  を固定し  $B$  を走らせたときの naturality は

$$\begin{array}{ccc} B & \mathbb{C}(A, GB) & \xrightarrow{\theta_{AB}} \mathbb{D}(FA, B) \\ \downarrow h & \downarrow (Gh) \circ & \downarrow h \circ \\ B' & \mathbb{C}(A, GB') & \xrightarrow{\theta_{AB'}} \mathbb{D}(FA, B') \end{array} \quad \text{となる。}$$

- 一方、  $B$  を固定し  $A$  を走らせたときの naturality は  $\begin{array}{ccc} A' & \mathbb{C}(A', GB) & \xrightarrow{\theta_{A'B}} \mathbb{D}(FA', B) \\ \downarrow g & \circ g \uparrow & \circ (Fg) \uparrow \\ A & \mathbb{C}(A, GB) & \xrightarrow{\theta_{AB}} \mathbb{D}(FA, B) \end{array} \quad \text{となる。}$

- 上 2 つをくっつけると、  $\begin{array}{ccc} A' & & B \\ \downarrow g & & \downarrow h \\ A & & B' \end{array} \quad \begin{array}{ccc} \mathbb{C}(A', GB) & \xrightarrow{\theta_{A'B}} & \mathbb{D}(FA', B) \\ \circ g \uparrow & & \circ (Fg) \uparrow \\ \mathbb{C}(A, GB) & \xrightarrow{\theta_{AB}} & \mathbb{D}(FA, B) \\ \downarrow (Gh) \circ & & \downarrow h \circ \\ \mathbb{C}(A, GB') & \longrightarrow & \mathbb{D}(FA, B') \end{array} \quad \text{となる。これが naturality の}$

意味になる。さらに、  $B$  を固定し  $A$  を走らせたときの図式で  $B'$  を固定した図式を考えくっつけると、

$$\begin{array}{ccc} B & \mathbb{C}(A, GB) & \xrightarrow{\theta_{AB}} \mathbb{D}(FA, B) \\ \downarrow h & \downarrow (Gh) \circ & \downarrow h \circ \\ B' & \mathbb{C}(A, GB') & \xrightarrow{\theta_{AB'}} \mathbb{D}(FA, B') \\ \uparrow g & \downarrow \circ g & \downarrow \circ (Fg) \\ A' & \mathbb{C}(A', GB') & \xrightarrow{\theta_{A'B'}} \mathbb{D}(FA', B') \end{array} \quad \text{を得る。}$$

- 中間を引っこ抜くと、  $\begin{array}{ccc} B & A & \mathbb{C}(A, GB) \xrightarrow{\theta_{AB}} \mathbb{D}(FA, B) \\ \downarrow h & \uparrow g & \downarrow (Gh) \circ ? \circ g \quad \downarrow h \circ ? \circ (Fg) \\ B' & A' & \mathbb{C}(A', GB') \xrightarrow{\theta_{A'B'}} \mathbb{D}(FA', B') \end{array} \quad \text{を得る。これは } f, g \text{ を id にした}$

りすることで上の式をすべて包含する。